

ペテロの手紙第2章9節「悔い改めを待つ主」

1A 遅らせていない主

1B 遅いが、遅れない主

1C 神の時空間

2C 預言による励まし

2B すみやかな救い

1C 絶対絶命に追い込まれる人々

2C 一気に敵を滅ぼされる方

2A 救いとなる主の忍耐

1B 悔る者の滅び

1C 神を無力とする者たち

2C 悪い実を刈り取る公正な方

2B 選ばれた者の悔い改め

1C 愛された子

2C 救いが主のみにある悟り

3A すべての人の悔い改め

1B 悪人の死を喜ばれない方

2B 疎外されている人の救い

3B 最後の人の救い

本文

ペテロの手紙第二を開いてください。前回、2章まで学びましたが、今日は手紙の最後、3章を学びます。午後に一節ずつ見ていきますが、今朝は9節に注目します。「主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」

主が再び来られるのが遅いのではないかとと思っている人々に対して、遅くなっているのではないよ、救われる人を忍耐して待っているのだよ、という、神のこころを知らせている文です。

最近、「～疲れ」という言葉がよくつかわれるようになりました。何か大きな事件が起こって、それに対処するのですが、なかなか前進や解決が見えない時に、疲れてしまうということです。戦争について言うならば、「ウクライナ支援疲れ」なんていう言葉が使われます。支援をしても、なかなか戦況が良いように見えない。自国の経済のこともある。だから、支援を減らそうという考えです。

けれども、そのような時に、敵は勢いづいてますます攻撃していきます。それでようやく、支援している国々がようやく目を覚ました、なんていうことがあります。そもそも、支援をする時に、その悪に決然と立ち向かい、最後まで戦うという決意をしておらず、本気で戦わないといけないと気づいていなかったのが問題なんですね。

それと同じようなことが、信仰生活にも言えます。イエスを主として信じて、生きていくということが、何となくそうなんだと思って信じました。けれども、信じた後に、いろいろな生活の思い煩いや、試練がやってきます。それをその場限りを、しのいでいけばよいのだと思ってやりくりしていくのですが、いつの間にか疲れてしまい、あきらめてしまうのです。そうではなく、初めに、信じていくことには犠牲があるのだと知って、本気で信じて生きる決意をして、信じるものです。もしそうでなければ、どこかの時点で目を覚まして、気づいて、本気の決断をします。

これと、主の到来を待ち望むことも、同じです。キリスト教会の中に、数多くの的外れな批判があります。イエス様がすぐにでも来られるという約束を信じている人々を、なじる人々、批判する人々が、キリスト教会の中にさえます。かつて、「今は亡き大いなる地球」という、ハル・リンゼイという方が書いた本があります。それで主の再臨を熱狂しました。けれども、10年経っても、20年経っても、主は来られない。そうして、主がすぐにでも来られるという教えを、間違いだとして徹底的に批判し、攻撃さえます。最近であれば、ティム・ラヘイさんの書いたレフトビハインドが、攻撃の的になっています。

しかし、そうした批判は、私にとっては、次と同じように聞こえます。「イエス様を信じたのに、バラ色の人生になると思って熱心に信じたのに、悪いことばかり起こるではないか。豊かないのちを得るという、イエスの約束は嘘っぱちだ！」主がすぐにでも来られるということを、何か感情的に反応して、熱狂していたのではないか？主が来られるということについて、そこに深い主のお考えがあって、覚悟の上で待ち望むということをしていなかったのではないか？と思うのです。

1A 遅らせていない主

それは、主が遅らせているのではなく、人々が悔い改めて主をお迎えするのを遅らせているからなのです。主は、聖書の中で何度も何度も、裁くと宣言されても、人々が悔い改めようとしていたら、憐れみを示して、裁きを遅らせることを明らかにしています。ヨナの説教で、ニネベの人々が悔い改めようとして、それで主は滅ぼすのを思い直されました。主は今すぐにでも来ようとされますが、それでも人々が悔い改めて、ご自身の名を呼び求めるのを待っておられて、ご自分の良しとする時には速やかに来られるのです。

1B 遅いが、遅れない主

ペテロは本文で、「**主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせて**

いるのではなく」と言っています。

1C 神の時空間

この言葉の手前で、「3:8 主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」と言っています。主は永遠の神であられ、この方は、私たちのように時空間に制約されていません。時空を超えておられる方です。ですから、何千年前のことも、今も、将来のことも、主にとっては変わらないのです。イエス様が、ユダヤ人たちの前で、「ヨハネ 8:56 まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」と言われました。モーセの前で現れた主は、「わたしは、ある」という名であると宣言されました。過去に主がおられたのではありません。主は、おられるのです。今も、主はおられるのです。将来も主はおられるのです。時間に制約されなくて、存在する方です。

ですから、一日を千年のように考える時もあります。その最も代表的な出来事は十字架です。それはたった一日で終わったことです。ところが、主は永遠の昔からご計画されていたことで、アダムが罪を犯してからすぐに、女の子孫として約束され、何千年もの備えをされて、永遠に人々を救うご計画の中心に据えておられました。

その逆に、千年も一日のようにみなされるのです。主が語られる時は、すでに完了したかのように語られます。旧約聖書は大半が、ヘブル語で書かれていますが、他の言語とは違って、未来形というものがありません。完了形と未完形しかありません。しかも、それは過去や未来に限定されないのです。つまり、主が将来のことを約束される時であっても、大半は完了形で書かれています。わたしは、これこれを行うと言われる時には、もう主の前ではそれが起こったように、みなしておられるのです。

だから、時空間に制約されている人間としては、じれっとなります。そこである実話をご紹介します。イスラエルの国が 1948 年 5 月 14 日に建てられました。ユダヤ人は世界中に散らばっていましたが、長い深い歴史を持っているのは、中東諸国に離散した人々です。イエメンという国のユダヤ人は、1950 年にイスラエルの国が建てられたことを聞きました。彼らはとても貧しかったのですが、信仰深い人々でした。イスラエル政府の用意していた、飛行機のところまで延々と歩き始めたのです。なぜか？「主が約束の地に帰らせると言われたから」ということです！イエメンのユダヤ人の歴史は、紀元前六世紀にまでさかのぼると言われます。ソロモンの神殿がバビロンによって破壊された後です。二千五百年待っていたのですが、まるでたった今、語られたかのように、そのまま信じて歩き始めたのです。「だって、主がそう言われたじゃん。」という純朴さだったのです。

主は、ハバククに対して、こう約束されました。「2:2-3 【主】は私に答えられた。「幻を板の上に書き記して、確認せよ。これを読む者が急使として走るために。この幻は、定めの時について証言

し、終わりについて告げ、偽ってはいない。もし遅くなっても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。」主が、ハバククに与えた幻について、遅くなったとしても、待ちなさいと命じられます。遅くなっても、遅れることはないと言われます。遅いのと、遅れるのは、大きな違いですね。遅くても、遅れなければ問題ありません。主の約束が遅いように見えても、決して遅れてはいないのです。



(1950年、イスラエルに発つために歩き始めたイエメンのユダヤ人家族)

2C 預言による励まし

しかし、主は私たちが時空間に制約されているのを、良く知っておられます。それで、主はしばしば、いや、しょっちゅう励まされます。全く約束がかなえられていないとして、意気消沈してしまうのをよく知っておられます。それで、絶えず預言によって励ましてくださっているのです。パウロが、ロマ書でこう言いました。「ロマ 15:4 かつて書かれたものはすべて、私たちが教えるために書かれました。それは、聖書が与える忍耐と励ましによって、私たちが希望を持ち続けるためです。」忍耐と励ましによって、私たちは希望を持ち続けることができます。

ペテロ自身、第二の手紙で行っているのは、この励ましです。預言のことばについて、灯としているとよいと勧めていましたね。「1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」

¹ [https://en.wikipedia.org/wiki/Operation_Magic_Carpet_\(Yemen\)#/media/File:Yemenites_go_to_Aden.jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/Operation_Magic_Carpet_(Yemen)#/media/File:Yemenites_go_to_Aden.jpg)

2B すみやかな救い

主は、自分の時を見計らっています。人々を救われますが、人々が、ご自身こそが救い主であることを知ることができるように、待っておられます。それは、自分自身が自分を救うことができないと分かって、ただ自分を救ってくださる方に任せる時を待っておられます。パウロは、エペソの劇場における騒動で死にかけた時のことを思い出しています。「Ⅱコリ 1:9-10 実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。」

1C 絶対絶命に追い込まれる人々

ですから、遅れているように見えるのですが、決して遅れません。救う時には、速やかに救われるのです。イザヤの預言には、アッシリア軍がユダの国の町々をどんどん攻め取って、ついにエルサレムが十八万五千人の軍隊に取り囲まれることが書かれています。もう絶対絶命です。ヒゼキヤは、これを「イザ 36:3 子どもが生まれようとしているのに、それを産み出す力がないのです。」とまで表現しました。ユダは、密かにエジプトに使者を送って援軍を確約していましたが、それは全く役に立たないばかりか、そのことがアッシリアに知れて、かえって窮地に立たせられていました。しかし、ある夜、主の使いがやってきて、その十八万五千人の軍隊を一気に滅ぼしたのです。

2C 一気に敵を滅ぼされる方

そのことを、神は、彼らを救われるご自身を、獅子のように喩えられました。また、すばやい鳥のように喩えられました。「イザ 31:4-5 獅子、あるいは若獅子が獲物に向かって吼えるとき、たとえ大勢の牧者がそこに呼び集められても、獅子は彼らの声にひるむことなく、彼らの騒ぎにも動じない。そのように、万軍の【主】は下って来て、シオンの山とその丘の上で戦う。万軍の【主】は、舞い飛ぶ鳥のようにエルサレムを守る。これを守って救い出し、これを助けて解放する。」

これが、主が救われる時に行われることです。主は、一人一人に対して、自分の力が尽き果てるのを待っておられます。それは、自分自身により頼まず、死者をよみがえらせる神により頼むようにするためです。もう遅すぎるように見える時であっても、獅子のように、あるいは舞い飛ぶ鳥のように、またたく間に私たちを救い出されるのです。そして、これが、主イエスの、「わたしは、すぐに来る」と言われた所以です。すみやかに来てくださいます。

2A 救いとなる主の忍耐

そしてペテロは、「**あなたがたに対して忍耐しておられるのです。**」と言っています。15 節には、「**私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。**」と言っています。主は、恵みをもって悪者にも良くしてくださっています。彼らが何とかして主に立ち返るためです。

1B 悔る者の滅び

1C 神を無力とする者たち

そうした主の忍耐を、かえって悔る者たちがいます。主が裁きを行われないので、主が再び来られるなんていうことは、起こらないとみなします。ここ3章でペテロが言っている通りです。「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」そして神は自分に対して何もすることができない、とさえ思っています。もっとひどいことに、主は自分のしていることを、是認しているとさえ思っています。

終わりの日は、そうした高ぶりによって、神をののしる者たちが大勢でできます。黙示録にそうした者たちの姿が書かれていて、その筆頭が獣、すなわち反キリストです。

2C 悪い実を刈り取る公正な方

しかし、主は、ご自身の忍耐によって、ご自身が裁かれる時に、だれもそれを不公平だと言えないように、その悪が明らかになるまで待っておられるのです。毒麦の喩えを思い出してください。畑に悪魔が毒麦の種を蒔きました。それで良い麦の中に毒麦も生えてきました。しもべたちは主人に、「マタ 13:29-30 いや。毒麦を抜き集めるうちに麦も一緒に抜き取るかもしれない。だから、収穫まで両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時に、私は刈る者たちに、まず毒麦を集めて焼くために束にし、麦のほうは集めて私の倉に納めなさい、と言おう。」と言いました。このようにして、悪い実が結ばれることによって、明らかにこの者たちが悪を行っているのを認めることができから、彼らを火の中に投げ入れることを決めているのです。

2B 選ばれた者の悔い改め

しかし、悔い改める者にとっては、その忍耐は救いなのです。ペテロは続けて、「だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」と言いました。

1C 愛された子

私たちは、放蕩息子のように、父なる神に愛され、選ばれている者たちです。息子が、遠い国に行って、放蕩の限りを尽くし、そこで飢饉が起こって、何も食べるものがなくなり、豚のえささえ食べたいとさえ思った時に、我に返りました。天にも、父にも罪を犯したことに気づき、父の家に戻ります。その時、父の方から息子の姿が見えると、近づいてきて彼に接吻するのです。彼が息子を待っていなかったら、そんなことはできません。主は、私たちを愛しておられ、予めご自分の子にするべく選ばれたのです。だから、悔い改めに進むように待ってくださっています。

2C 救いが主のみにある悟り

そして、先ほどパウロがエペソで死にそうになって、よみがえりの主により頼むことによって救われたように、私たちが自分の知恵や力ではなく、主の憐れみにすがるところまで待っておられます。

3A すべての人の悔い改め

ここで、ペテロが、「**すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる**」と言っていることに注目してください。

1B 悪人の死を喜ばれない方

主には、差別がありません。私たち人間には、この人は救われるに値しないと以为っていても、主には、高価で尊いのです。「エゼ 18:23 わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか——【神】である主のことば——。彼がその生き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか。」主は、悪しき者の死を喜ばれないのです。悪に報われる時に、主は決して喜んでそれを行われません。深い悲しみを覚えて、ご自分の正義のゆえに強いられて行われるのです。しかし、どんなに悪いことをしている者でも、悔い改めたら、その罪をすべて赦されます。

2B 疎外されている人の救い

そして、この「**すべて**」には、疎外されている人々も含むのです。人々に憎まれ、嫌われている人々にも、主の憐れみは及びます。ザアカイのことを思い出してください。彼は取税人でした。取税人は、仲間のユダヤ人から憎まれていました。しかし、イエス様がエリコを通られた時に、彼は、いちじく桑の木の上に登って、イエスを観ようとしました、するとイエスのほうから、「ルカ 19:5 ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから。」と言われました。そして、彼の家に救いをもたらしたのです。

3B 最後の人の救い

そして、この「**すべて**」には、最後の人も含むという意味があるでしょう。どんなに遅くても、それでも主はその人を救われます。イエス様が十字架への道を進まれている時に、ザアカイの前には、盲人がイエス様に近づいて、「ダビデの子よ、私をあわれんでください。」と叫びました。イエス様が、「何をしてほしいのですか。」と尋ねると、「主よ、目が見えるようにしてください。」と言います。それで、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救いました。」と言われました。彼はただちに見えるようになって、そのままイエス様について行ったのです。(ルカ 18:41-43)彼は、そのまま十字架で死なれる姿を見なければならなくなります。もっと、後の人がいましたね。主と共に十字架につけられた人です。「御国に入られるときには、私を思い出してください。」と願ったら、「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」と言われました。(23:42-43)最後の最後まで、主は救いのみわざを行われるのです。

主は言われましたね、「後の者が先になり、先の者が後になります。(マタイ 20:16)」五時から雇われた者たちでも、彼らに朝から雇われた者たちと同じ賃金を払いました。主はここまで恵み深く、気前が良いお方なのです。しかし、主は悪をそのままにしておかれる方ではありません。必ず裁かれます。しかし、悔い改める者たちのために待っておられるのです。